

2020年7月26日礼拝説教要約

詩篇の言葉で祈り、賛美する②

「主に油注がれた者」

(詩篇2:1-12)

一、詩篇2篇について

詩篇第1篇は後から付け加えられたようです。と言いますのは、古い訳本に現在の第2篇を第1篇と呼んでいるものがあるからです。そういうわけで詩篇は、まず第一巻と第二巻が編集され、その後、第二巻、第四巻、第五巻と増し加えられて行き、最後に「前書き」の意味合いで1篇が付け加えられた可能性があるということ、前回お話ししました。以上のことから考えますに、第2篇はかなり昔から存在していたことになりそうです。では、第2篇は何なのでしょうか。どう考えても、ヘブライの子ダビデの祈りには思われません。説明されるまでもないことです。詩篇第2篇が、元々は最初の詩篇であったとすると、なぜこの詩篇を置いたのかという疑問が湧いてまいります。

私はこう考えます。内容から判断しますに、詩篇3篇からヘブライの子ダビデの祈りの本文になります。3篇において、ダビデはいきなり訴えています。3・1主よ、なんと私の敵が多くなり、私に向かい立つ者が多くいることでしょうか。このように訴えた人こそ、地上における神の代理者とし

て主から油注がれたダビデ王であったというつながりで見ています。

二、霊の目が開かれるなり

イスラエルはその昔から、エジプト、アッシリア帝国、新バビロニア帝国という、強靱な大国のはざまに揺れ動く小さな国でした。そういう意味では、1節から3節の、**なぜ 国々は騒ぎ立ち**もろもろの国民は空しいことを企むのか。なぜ 地の王たちは立ち構え 君主たちは相ともに集まるのか。主と主に油注がれた者に対して、「さあ彼らのかせを打ち砕き 彼らの綱を解き捨てよう。」は、現実には当てはまりません。2節**主と 主に油注がれた者**に対して、を除けば、これは聖書の舞台となった古代オリエントの国々が行っていた姿です。

すなわち、大国が世代交代をするとき、大国に隷属していた国々は同盟を組んで、大国の支配から抜け出そうとすることが起きていました。それが、3節の**「さあ彼らのかせを打ち砕き 彼らの綱を解き捨てよう。」**という言葉です。そうしますと、現実には、小国イスラエルに対して周辺の国々がそのように企むのはあり得ないことです。

2篇の作者は、当時のイスラエルの周辺国が抱いていた発想を逆転させて語っています。なぜなら作者には、まことの支配者である神が見えていたから

です。作者には見えていました。地上に強大な国が起きては周辺国を呑み込んで行く。しかし、背後ですべてを支配しておられるのは主なる神であると。

三、見えない神が見える

霊の目が開かれますと、見えない神が見えてまいりますし、主が語っておられる声が聞こえてまいります。4-6節です。**天の御座に着いておられる方は笑い 主はその者どもを嘲られる**そのとき主は 怒りをもって彼らに告げ 激しく怒って 彼らを恐れおののかせる。「わたしが わたしの王を立てたのだ。 わたしの聖なる山 シオンに。」と。

神が、ある状況の中でどのような表情をしておられるか、何を語っておられるかは、もちろん私たちが勝手に決めることはできません。私たちは神の言葉である聖書を読み続けることによつて、こういう時には主はどのような表情をされているか、何を語りかけておられるかがだんだん見えて来るのだと思います。聖書の言葉と聖霊の働きは切り離せませんから。

たとえば、1節から3節の、諸国の王たちの傲慢さに対して、4節で**天の御座に着いておられる方は笑い 主はその者どもを嘲られる**と語られています。神は傲慢な者を退け、嘲られると知るわけです。

四、詩篇2篇と主イエス

詩篇2篇は、主からの油注ぎを受けた地上における神の代理者である王について語られています。本篇が語っている王は、やがて理想的な王、救い主として受け止められるようになりました。そして、主イエスこそ油注がれたお方、すなわちメシア・キリストと信じた教会は、詩篇2篇はイエス・キリストのことを指しているかと理解するようになりました。と言いますのは、多くの箇所です。詩篇2篇が主イエスのことを指しているとして語られているからです。たとえば、マタイの福音書3章16節、17節です。イエスは、バプテスマを受けて、すぐに水から上がった。すると見よ、天が開け、神の御霊が鳩のようにご自分の上に降って来られるのをご覧になった。そして、見よ、天から声があり、こう告げた。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」と。詩篇2篇からの引用です。

あるいは、使徒の働き4章25節、26節。その他、ヘブル人への手紙にも詩篇2篇からの引用があります。また、黙示録には**鉄の杖**という表現が3回現れます。詩篇2篇からの引用です。そういうわけで、詩篇2篇は主イエス・キリストのことを語っていると読むのが的を射ていると言えます。すなわち、イエス・キリストこそ、油注がれた者(メシア)であり、王であり、神の子なのです。